

発達障害からみた合理的配慮

日本発達障害ネットワーク

その特徴：

- 1 新しく認識された障害であり、外見だけではその存在は分かりにくい。
- 2 発達障害は集合体であり、連続体であるため、一人一人特性が異なっており、それぞれの抱える困難さは異なっている。
- 3 家庭と学校を含め、置かれる環境や対応の影響を受けやすい。
- 4 遺伝歴背景の存在が明らかになりつつあり、家族全体の問題になっていることがある。
- 5 二次的な問題が前面に出ていることもある。

その配慮：

- 1 特性は外見だけでは分かりにくく、怠けや、努力不足と判別して配慮する必要がある。
- 2 疾患が重複している場合もあり、それぞれの特性に応じた対応を配慮する必要がある。
- 3 適切な環境を用意し、適切な配慮を行えば困難性は減少する。
- 4 担任だけでなく、学校全体としての配慮が必要である。
- 5 背景に発達障害が存在していることに配慮する必要がある。

具体的には：

- ・ 自信喪失しないために、肯定的、具体的、視覚的な伝え方を工夫する。
- ・ スモールステップによる支援で自己肯定感を高める。
- ・ 感覚面の配慮（音、温度、湿度、接触など）を行う。
- ・ 得意な部分から情報アクセスし、自信を高める。面からの働きかけを行う。
- ・ 苦手な部分については、課題の量・質の与え方に配慮して、柔軟な評価をする。
- ・ 集中を高める環境的配慮、分かりやすいルールを示す。
- ・ 失敗体験への寄り添い、成功体験への十分な評価を行う。